

2025年度東京藝術大学音楽学部

入学試験問題

出題意図等

作曲科（自由作曲）

- ・「出題意図等」とは、出題意図あるいは標準的な解答例のことです。
- ・「出題意図等」についての問い合わせには対応いたしません。

- 1) ピアノ三重奏曲の基本的な楽器編成は「ヴァイオリン、チェロ、ピアノ」である。第3回試験の「自由作曲」における楽器編成リストには、クラリネットなどの管楽器も含まれており、このことから、ピアノ三重奏曲にはさまざまな編成が存在する。例えば、ブラームスの《三重奏曲 イ短調 Op.114》を例に挙げるまでもなく、「クラリネット、チェロ、ピアノ」や、本問題の「クラリネット、ヴァイオリン、ピアノ」のように、弦楽器に加えて木管楽器を含む編成も多く見られる。このような作品においては、木管楽器の機能や音色的特徴をどのように活かすかが、作曲上の課題となる。また、二重奏曲や三重奏曲といった室内楽曲におけるピアノパートは、他の楽器と対等に扱われ、その役割や書法についても、これまで実践してきた作曲の成果が問われる。
- 2) クラリネットについては、曲全体を通して、低音域（シャルモー音域）から鮮やかな高音域まで、幅広い音域の特性と音色を効果的に活かしたパートであることが望ましい。
- 3) ヴァイオリンのパートは、重弦によるピッツィカート奏法で始まる。この奏法は、この部分に限らず曲中の他の箇所でも十分に活用されることを想定している。
- 4) 本問題では、「ただし、序奏部を伴うソナタ形式とすること」と明記されている。このことから、与えられた主要主題の前に「序奏部」を置

き、配付された楽譜を書き写すことになる。そのため、設問の内容を十分に把握することが求められる。また、この設問を読んだ際に、序奏部を含むソナタ形式の実作品が頭に思い浮かぶことも重要である。これらを踏まえ、読譜・試聴・演奏などを通じて、序奏部を含むソナタ形式についてどの程度、理解しているかが問われる。

- 5) 冒頭の和声進行は、I の和音の第 1 転回形で始まり、ドッペルドミナントによる減七の和音を経て、再び第 1 転回形の I の和音に戻る。この進行に見られる「6 ♯ 6」の刺繍和音を含む特徴的な和声進行は、展開部など他の部分でも効果的に活用されることが望ましい。
- 6) 2 小節目の第 1 拍並びに 4 小節目以降の各パートには、上方倚音および下方倚音が含まれている。これらの倚音は第 1 主題を特徴づける要素であり、楽曲全体を通じて適切に活用されているかが求められる。
- 7) 与えられた主題の最後では、ナポリの 6 の準固有和音から増六の和音（ドッペルドミナントの 9 の和音の根音を省き、第 5 音を下方変位させた第 1 転回形）を経て、I の第 2 転回形へと進行する。この和声進行の後、どのような和声が用いられ、第 1 主題の確保（または推移）へと導かれているかを確認する。

- 8) 第1主題の素材から第2主題をどのように導き出しているか、さらに展開部において与えられた約8小節の楽想を用い、主題をどのように展開させ、遠隔調などを含む転調が行われているかが問われる。
- 9) 提示部は序奏部から始まる。また、第1主題の冒頭はクラリネットの旋律とヴァイオリンの伴奏で構成されている。再現部においては、与えられた約8小節の楽想をどのように提示し、楽器編成を同様に二重奏または三重奏とするかについて、受験者の創意工夫が求められる。